

おわりに

筆者は、大阪市立の中学校教諭として人権教育に根ざした生徒集団づくりの実践をすすめてきました。「荒れる」生徒に、やさしく、時には厳しく寄り添う学級の仲間のかかわりに感動したものです。ところが、子どもたちの人間関係が希薄になり、これまでの生徒集団づくりの手法が空回りする状況が見られるようになりました。社会を震撼させた神戸の連続殺傷事件や佐賀のバスジャック事件などは、一人ぼっちの子どもの叫びのように感じられ、寄り添う仲間の大切さを痛感させられた出来事でもありました。多くの課題を背負った子どもたちが、仲間に支えられながらたくましく生きていく関係をどうつくっていくのが、私にとっての大きな課題となり、兵庫教育大学大学院で夏野良司指導教官のもとで教育臨床を学ぶ機会を得たのです。そして、「ピア・サポート」の存在を知り、仲間を支援するスキルのトレーニングに大変興味を持ちました。さっそく、群馬県の鎌倉中学校のピア・サポートの合宿に参加させていただき、「いい話の聴き方」のロールプレイをしている子どもたちのいきいきとした顔を見て、「ピア・サポートは単なるスキル学習ではないんだなあ」と実感したものです。

その後、修士論文のテーマに「中学校でのピア・サポート」を取り上げ、2001年4月から1年間、大阪市内の公立中学校2年生の選択教科で「ピア・サポート」を開講し、トレーニングを実施しました。子どもたちは、温かい心のふれあいやサポートの疑似体験を通してどんどん元気になり、学んだスキルを日常生活に生かしながら、友達とのいい関係をつくることができるようになってきました。また、友達の相談にのると、「ありがとう」「気持ちをおわかってくれてうれしい」という感謝の気持ちをフィードバックされ、友達の役に立っていると実感し、自分の存在に「意味」をもつことができましたようです。

ピア・サポートの実践を発表するたびに、指導案やワークシートが欲しいとの声が多くあり、学校現場のニーズの高さを感じました。しかし、多忙な学校現場では、時間や労力がかかるものは、なかなか取り組みにくいものです。そこで、研究実践をまとめた自筆の実践集に修正を加え、“誰もが、すぐに始められる、ピア・サポートの指導案とワークシート集”として本書を出版することにしました。

最後に、個人的にまとめた実践集を本にすることをすすめてくださった指導教官である夏野良司教授に心から感謝申し上げます。また、私のピア・サポートの実践のスーパーバイザーでもあり、本書の監修を引き受けていただいた森川澄男先生にあらためてお礼申し上げます。さらに、本書の刊行にご尽力くださった「ほんの森出版」の佐藤敏社長、小林敏史氏に厚く感謝の意を表します。

平成14年11月20日

*本書は第7版（平成27年2月）を刊行する際、少し修正を加えさせていただきました。長きにわたり活用いただいていることを大変うれしく思います。現在、大学で教員をめざす学生に本書を活用して授業を行っています。受講している学生間のつながりができ、エンパワーされている姿を見るにつけ、あらためてこのプログラムの有効性を実感しています。

菱田 準子